
場所文化フォーラム

「女性活躍@高崎市、原発問題@大熊町
を題材にしたチェンジ・メイカー育成プログラム」

背景とプログラムの狙い

背景

地域において、地域の担い手を育成する仕組みを、地域で持っていくことは、次世代に地域をつむいでいくためにも必要な機能であると考えている。

本事業では、
①群馬県高崎市、②福島県大熊町にて、地域の課題を学習者が発掘・設定し、1ヶ月、3ヶ月、あるいは数ヶ月連続的に同じ地域の方々と関わりながら、「チェンジメーカー」育成のプログラムを開発する。

現在のリカレント教育においては、明確な社会課題を提供し、その中で、課題解決を思考し、実行する教育が多い。

本事業では、課題を与えずに、探求してもらうことに重きをおき、学習者の受入側の問題意識や課題設定、その解決策（活動手法等）に対しても、問題意識をもってもらい、学習者が当事者として、自分だったらどうするのかを考えることができる教育プログラムとする。

プログラムの狙い

- ・対象者は、社会人、学生等
- ・課題を探求する能力を伸ばすプログラム
- ・本年度は、5年間を通して事業者としてプログラム開発のノウハウ・知見を蓄積する中で、人口37万人の中核市である「高崎」、一方、原子力発電所の事故により一からまちづくりを始める「大熊」が抱えている課題ならびにプログラムの構成要素と参加者の能力開発の相関関係を明らかにし、共通する課題を抱える全国の地方の現場においても、プログラムをカスタマイズして、人材開発プログラムを提供していく。

実施内容：プログラム設計

<事業概要> フィールド①群馬県高崎市

■大テーマ・課題：群馬県の中核都市・高崎市（人口37万人）。少子高齢化が進む地方都市として様々な課題が顕在化してきているが、そんな中で、今回の受入先となる佐藤病院、山名八幡宮、金澤屋、しののめ信用金庫は、地域の課題解決のために様々な取り組みを行っている。核家族化、共働き化が進む中で、女性の働き方を含めてどのような家族像を目指すべきなのか（佐藤病院）。地域のコミュニティの中で、神社はどのような役割を果たせるのか（山名八幡宮）。地域の金融機関として、信用金庫は地域経済へどのような貢献ができるのか（しののめ信金）。高崎に限らず、日本各地で同じ社会課題が発生している。参加者は自ら課題を設定し、解決に向けた取り組みを行う。

■研修概要

①10月8日に開催される美スタイルマラソン
<http://bistyle-run.com/>（子宮頸がん予防・撲滅）、10月15日に開催される山名大祭のマルシェイベントなどに参加して受入事業者が地域の中で果たしている役割を実感。

②各受け入れ母体の新規事業・ビジネスの立ち上げに関わる。

③①、②の経験を踏まえ、高崎で、コミュニティビジネスを立ち上げるための行動計画を立案する。立案するだけでなく、地域の人脈(街のキーマン、金融機関など)等を得て、次年度以降、具体化を検討していくものを目指す。

■学習者（下記、2形態で実施する）

学習者①：7名（報奨金6万円／人を支払う）

- 10月1日から10月15日まで、美スタイルマラソンの運営準備、山名大祭のイベントの企画運営・準備
- 10/24.25プログラムふりかえり
- 10/29.31人に会いに行く旅プログラム
- 10/26.11/2.11/16社会×デザイン（働き方のデザイン講義等）
- 11/7高崎・大熊プログラムとの相互交流@東京
- 12月2日まとめイベント

学習者②：4名（報奨金20万円／人月×3ヶ月を支払う）

- 10月1日から12月末（3ヶ月）の常駐プログラムに参加（2名）
- 10月15日から1月15日（3ヶ月）の常駐プログラムに参加（2名）
- 常駐先：佐藤病院（受元：佐藤先生）、山名八幡宮（受元：高井宮司）、しののめ信用金庫（受元：横山理事長）

実施内容：プログラム設計

<事業概要> フィールド②福島県大熊町

■大テーマ・課題：東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故を経て、漸く、平成31年春に避難指示解除となる。これに合わせて、大熊町では、現在、未来会議という実践するための会議母体をつくり、若手職員（20代から30代）により、これからのまちづくりに関するアクションプランづくりを行っている。例えば、シンボルとなり、新しいコミュニティの再生の場としての古民家再生事業、外部からの研修受け入れ事業等を柱に具体的な行動計画を立案しようとしている。

学習者には、この行動計画立案、実行におとしていく準備段階の現場をつぶさに体験してもらい、学習者は、この厳しい環境下にあるものの、他ではあまり体験のできない、ハード・ソフト両面において、0から始まる大熊町のまちづくりを体感してもらい、例えば、大熊町を想定し、各人がコミュニティビジネス等を立ち上げる場合の行動計画を検討する。良いもの、地域の賛同をえられたものは、次年度以降も具体化を検討していく。

■研修概要

①10月から12月に、毎月2回（全6回）開催する未来会議などへの出席

②大熊町に対する提案。

■学習者：9名（旅費負担。場所は、大熊町、郡山市、会津若松市、いわき市）

10/10.11オリエンテーション@大川原連絡事務（大熊町現地視察含む）

10/24 未来会議@中通り連絡事務所への参加

11/7高崎・大熊プログラムとの相互交流@東京

11/28 未来会議@中通り連絡事務所への参加

12/5 未来会議・部会への参加

12/19 未来会議・部会への参加

実施内容：参加者構成

フィールド①群馬県高崎市（20日間プログラム） 7名

【属性】

- ・性別：7名中6名が女性、1名が男性
- ・職業：7名中5名が主婦（30代）、2名が学生（20代）
- ・参加動機：自分の空いている時間にできそうなことだった。

地域の他の人に出会えるということに興味有り等

女性	群馬県内 (高崎市)	30代	主婦
女性	群馬県内 (吉井町)	30代	主婦
女性	群馬県内 (高崎市)	30代	主婦
女性	群馬県内 (高崎市)	30代	主婦
男性	群馬県内 (高崎市)	20代	高崎経済大学3年
女性	群馬県内 (高崎市)	20代	高崎経済大学4年
女性	群馬県内 (高崎市)	30代	主婦

フィールド①群馬県高崎市（3ヶ月間プログラム） 4名

【属性】

- ・性別：4名中3名が女性、1名が男性
- ・年齢：4名中2名が30代、2名が20代、職業はそれぞれ異なる。
- ・地域：群馬在中2名、県外2名

・参加動機：

- － 起業したいと考えおり、その足がかりやネットワークを構築できればと思った。
- － 地域に根ざしている事業で、本来事業だけではなく、地域活性化をしている事業とはどのようなものかということに興味があった。
- － 漠然と「地域創生」や「地域再生」というものに興味あり、実際に、地域というものに関わりたいと思った。
- － 海外で仕事をしていく計画があり、その前にできるだけ多くの縁をもらった地域を体感したいと考えた。

男性	群馬県内 (高崎市)	30代	
女性	群馬県内 (高崎市)	30代	主婦
女性	群馬県外 (京都市)	20代	同志社女子大学
女性	群馬県外 (富山市)	20代	フリーランス

実施内容：参加者構成

フィールド②福島県大熊町

【属性】

- ・性別：9名中2名が女性、7名が男性
- ・職業：9名中6名が学生、3名が社会人、年齢は、全員20代であった。
- ・参加動機：
 - － 東日本大震災が起こった当時は10代だったため、今きちんと向き合いたいと思った。
 - － 自ら、復興に参画したい。復興の意義を考えていきたい。
 - － とにかく、なにか行動をおこしたいと思った。
 - － 地方や町の復興には前から興味があった。
 - － まちづくりや都市の諸問題について研究しているが、実際の現場との乖離を感じていた。

男性	20~24歳	慶應義塾大学	総合政策学部
男性	25~29歳	株式会社プライセン	イメージングソリューション部
男性	20~24歳	青山学院大学	地球社会共生学部
女性	20~24歳	法政大学	社会学部
男性	20~24歳	東北福祉大学	総合福祉マネジメント学部
男性	20~24歳	京都産業大学	外国語学部
男性	20~24歳	London School of Economics and Political Science	Geography and Environment
女性	20~24歳	無職	無所属
男性	20~24歳	横浜国立大学大学院	環境情報学院

実施内容：受入先

フィールド①群馬県高崎市

■ 受入先概要①

佐藤病院（群馬県高崎市若松町96）：

- ・分娩数は年間約1500。産婦人科としては規模でも全国有数（日本で最も多い病院は約3000分娩／年、佐藤病院は全国で26番目に多い）の病院であり、現在は医家12代目佐藤雄一氏が院長を務める。
- ・雄一氏は日本産婦人科学会専門医や日本抗加齢学会専門医、日本女性医学学会女性ヘルスケア専門医、など多くの専門医資格を持ちつつ、女性の心と体の健康の増進、予防啓発活動を行っている。
- ・佐藤病院としても妊娠するための心とからだづくり、妊娠出産後の生き方と健康づくり、選択肢の多い女性の生き方を支える地域社会づくりに邁進している。妊娠したときに女性は初めて、女性としての心身の健康、母子への栄養（食）、睡眠の質・あり方に向き合う。
- ・この妊娠という女性の気付きの節目を機に、佐藤病院ではプレコンセプションケアとして様々な学びのプログラムを展開している。

■ 受入先概要②

山名八幡宮（群馬県高崎市山名町1581）：

- ・山名八幡宮は守護大名山名氏の祖山名義範が安元（1175年-1177年）年間、宇佐神宮の分霊を勧請して社殿を造営し、武運の神として崇敬したのが創設。南北朝時代に南朝の尹良親王が山名城に滞在、城主の娘が親王の子を懐妊しその安産を祈願して以来、安産・子育ての神として西上州の信仰厚く称えられ、現在でも多くの家族が祈願に訪れている。
- ・山名八幡宮では、今一度神社の本来のあるべき姿を見つめなおし、「ハレの日」はもちろん「日常の場」として人々が集まり、心の拠り所となる神社を目指している。そうした趣旨から、以下のような事業を神社境内にて展開している。

①ミコカフェ

子育て中のお母さんや、妊婦さんをメインターゲットにした、小さな子連れでも気軽に立ち寄れるキッズマタニティーカフェ。化学調味料を使わない、体に優しい安心安全の食事を提供。子育てに関する様々なセミナーも随時開催。

②あそびばプロジェクト

みんなで作るあそびばプロジェクトは、古くから地域の中心であった神社の境内地に、自分たちの手であそびばを作っていくことで、神社がかつて持っていた「あそびば」としての機能を復活させる為、毎月1回季節を感じることでできるイベントを開催。

③ピッコリーノ

厳選した素材を使用して、小さなお子様からお年寄りまで毎日食べても飽きない、安全でおいしい無添加の天然酵母パン屋。日常の食事であるパンを通じて、自然と交流が生まれる場所を目指す。

実施内容：受入先

■受入先概要③

しのめ信用金庫高崎支店（群馬県高崎市上中居町58）：

- ・しのめ信用金庫は、日本で本来的な産業組合への回帰を目指すべく動き始めた信用金庫である。金本位主義ではなく「愛本位主義」を社是としている。金じゃなく愛なのだ。信金業界のチェンジメーカーである。
- ・日本の中でいち早く社会課題の本質に気づき、自ら行動を起こしたのがしのめ信金である。その第一歩目が、いわゆる「まちの編集室」の立ち上げである。グローバル金融機関ではなく、地域事業者と一体化したローカルファイナンスたるべく、平成30年6月正式に設立された。
- ・しのめ信金今後経営の基本方針（i 地域金融事業としての本願へ回帰 ii お金でお金を稼ぐのではなく、地域事業の収益増を主眼に iii 地域の社会課題に市場が潜在。）
- ・地域の持続の源として まちの編集室の設置（i そうした方向に適応した金融人材としての再認識、触発、気づき、育成が急務 ii まちの編集室を設置、地域の社会課題に向き合い、地域のリソース再発掘、社会課題の解決に向け、自身が新たに問いを立てる iii 編集室の設置に併せ、各支店では地域社会課題を共有するワークショップを定期開催。）
- ・今後の取組として、オープンイノベーションの導入
 - i 連携実施事項1 こうした草の根的な地域社会課題の拾い上げとともに、先行する地域事業や社会性ある事業に着手している同士を招聘、学びの機会を増幅させる。
 - ii 連携実施事項2 同様の課題を抱える日本全国の信用金庫職員の意志ある人間を招聘、相互に人事研修交流を実施
 - iii 連携実施事項3 信用金庫だけでなく、未来の金融マンたち（高校生、大学生、院生等）にこれからの金融とりわけローカルファイナンスの基本姿勢と一緒に学ぶ機会と場所を創設する。

フィールド②福島県大熊町

■受入先概要

大熊町役場内未来会議：20代から30代の若手職員から構成される。震災以降、月1回集まり、まちびらき以降のまちづくりの方針、アクションプランづくり、事業化準備等をおこなっている。

成果：概要

達成したい状態

参加者

- ・物事に対して、当事者意識を持つことができる。
- ・地域の課題を探求し、発掘できる。
- ・その上で解決策を提案できる。
- ・地域の方々とのコミュニケーション能力の向上

受け入れ先

- ・研修プログラムを構築
(様々な考え方を持つ方々を迎えて、研修プログラムを提供することの課題を得る)

実際の達成度

参加者

・高崎 20 日間プログラムにおいては、主婦（子どもを持つ）の方々が大変を占めた。結果的に、地域や社会というものが身近なところにある、接点をもつことができ、また、小さなビジネスを生み出すこともできるかもしれないという可能性が芽生えた。

・高崎 90 日プログラムにおいては、ホスティングという事業で、個人事業主として自立するという者ができたり、女性の身体や健康というテーマで事業化していくために修行を続けるという者ができたりしている。

・大熊町プログラム学習者においては、復興といった思い入れを描き参加したところ、復興の現実を知り、地元住民とのコミュニケーションの難しさを体感し、どうしたらよいかわからなくなる中、最終的に、住民との気持ちに寄り添いながら、学習者自ら提案を行うに至った。

受け入れ先

- ・研修プログラムを構築（改善を含む）

理由・改善/発展の方向性

・高崎、大熊町ともに、本プログラムの目標等について、あえて事務局側で学習者に与えなかったため、学習者は多いに悩むという状況に陥った。

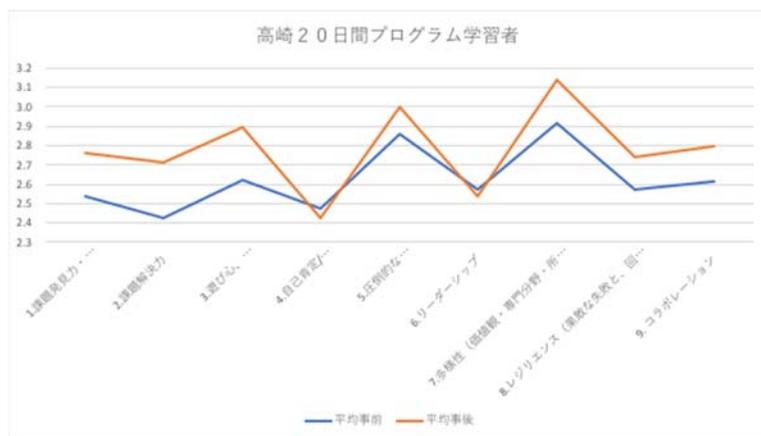
・そのサポートとして、学習者と常にミーティング（ウェブ上、実際に会う）を行うことで、受け入れ先も、人を長期に預かるという学び、学習者も悩みを克服していった。

・また、次回は、人材の選出と受け入れ先とのマッチングを丁寧に行う。

成果：詳細

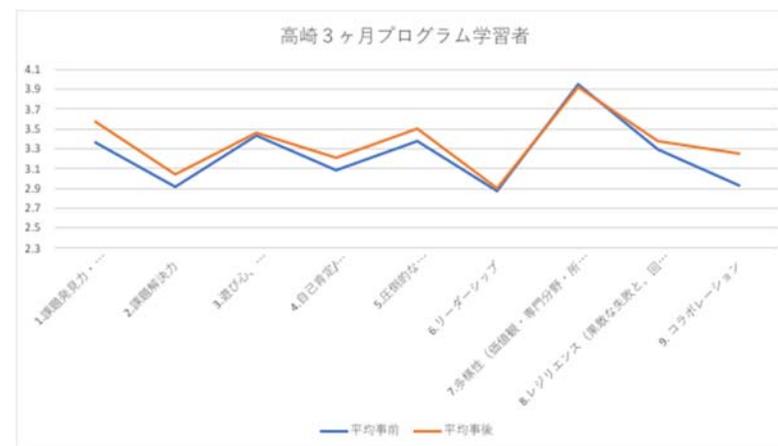
成果測定：事務局（ボストン・コンサルティング・グループ）作成のウェブサーベイを利用して測定

【高崎 20日間プログラム学習者】



結果：研修内容の実施前と実施後の事前と事後のウェブアンケート調査結果（7名平均）を比較すると、概ね、事後の伸びているが、「4.自己肯定/自己効力」と「6.リーダーシップ」について、事後の方が低い結果となった。

【高崎 3ヶ月プログラム学習者】

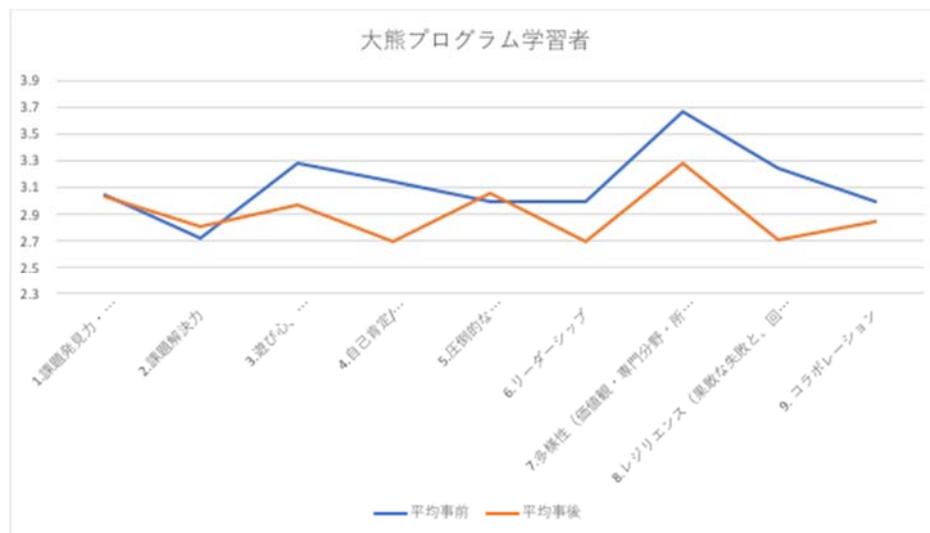


結果：研修内容の実施前と実施後の事前と事後のウェブアンケート調査結果（4名平均）を比較すると、概ね、事後の伸びているが、若干、「7.多様性（価値観・専門分野・所属・国籍）の受容力・共感力」について、事後の方が低い結果となった。

成果：詳細

成果測定：事務局（ボストン・コンサルティング・グループ）作成のウェブサーベイを利用して測定

【大熊町プログラム学習者】



結果：研修内容の実施前と実施後の事前と事後のウェブアンケート調査結果（9名平均）を比較すると、「2.課題解決力」、「5.圧倒的な当事者意識」のいが事後高まったという結果となった。

この結果については、本当に、厳しいまちびらきを控えた、福島県大熊町のまちづくりの現状、町の人達とのコミュニケーションの難しさ、自分の実力不足を痛感した等の結果であると推測できる。。

一方で、このような環境の中、今回の事業で求めた課題解決力や当事者意識についてきちんと、醸成されたという結果となった。